

The Unvanquished 管見

—— 短編から小説へ ——

太 田 直 子

I

Q. Sir, what book would you advise a person to read first of yours?

A. Well, that's not a fair question to ask me. . . .

If you are asking me to give an objective answer I would say maybe *The Unvanquished*.

Q. Why would you select that one?

A. Because it's easy to read. Compared to the others, I mean. . . .

—— *Faulkner in the University* ——

ヴァージニア大学での学生との質疑応答で、Faulknerは彼の作品の中で *The Unvanquished* をまず読むことを学生に勧めている。非常に難解であるといわれる彼の作品の中で、子供向きの本とも評される *The Unvanquished* は、確かに“easy to read”と言えるが、その理由だけで作者自身がこの作品を推奨したのではない。この作品の題材が Faulkner の世界を最も簡潔に理解し得るように表現されていることに他ならない。*The Unvanquished* は、彼の曾祖父 Colonel W. C. Falkner をモデルとする Colonel Sartoris をめぐって、アメリカ南部文学の神話の土壌となっている南北戦争の戦中戦後に、作者の故郷で実際に起こった事件や登場人物を素材としているからである。⁽²⁾

The Yokonapatawpha Saga と呼ばれる彼の創作世界のいわゆる「傑作の時代」 (“The Great Years”) は、*Sartoris*(1929) に始まり、*The Sound and the Fury* (1929), *As I Lay Dying* (1931), *Light in August* (1932) と連続的に大作が発表され、*Absalom, Absalom!* (1936)へと彼の意欲的な創作活動が続いた。この間に書かれた短編が *The Unvanquished* として編集されたことは注目に値する。*The Unvanquished* は1938年2月に Random House 社から出版されたが、この作品はこれらの傑作の中に入れられることはなく、二流レベルに

とどまる作品として評価されている。こうした評価は *The Unvanquished* の出版経緯によるところが大きい。

The Unvanquished は、7つの短編からなっている。これらは一編が書き上げられると次の一編というように作者自身が満足を得るために書き加えられたもので、“I saw them a long series”, “...revised for a novel form...”⁽³⁾と Faulkner 自信が語っているように、その執筆理由はもっと現実的なものであった。7つの短編—“Ambuscade,” “Retreat,” “Raid,” “Riposte in Tertio,” “Vendée,” “Skirmish at Sartoris,” “An Odor of Verbena”—のうち、最後の“An Odor of Verbena”を除く6編が1934年から1936年にかけて *Saturday Evening Post*, *Scribner’s Magazine* に掲載されている。⁽⁴⁾ いずれも Faulkner の傑作 *Absalom, Absalom!* (1936) よりも前に書かれた作品である。

Saturday Evening Post は、アメリカの大衆娯楽雑誌である。掲載される作品に対する執筆料が\$4,000以上も払われたという記録もあるように、1920年代30年代に活躍した作家にとって、*Saturday Evening Post* は、職業作家として生活を支え、かつ一流作家への登竜門として大いに魅力的な存在であった。大衆娯楽雑誌とはいえ *Saturday Evening Post* に掲載されることは非常な難関であり、Faulkner の作品も1930年まで *Saturday Evening Post* 社に拒否され続け、Blotnerによれば Faulkner は、1930年から32年にかけて32の物語を送ったにも関わらず、そのうちの5作品しか受理されなかったという。⁽⁵⁾ この一例をもってしても解るように、*Saturday Evening Post* が大衆娯楽雑誌としての徹底した主旨を持っていたことがわかる。従って、彼の作品がこの雑誌に掲載されたということは、難解な作品といわれる Faulkner の作品の中で、*The Unvanquished* が大衆雑誌の読み物という別の一面を持っている可能性があることを示している。

1937年の10月中旬に Faulkner は New York におもむき、“series of short stories”を小説化することを意図して運動したが、彼の思惑に反して *Saturday Evening Post* 社には買収取られず、この小説版が最終的に Random House社から出版されたことは、注目すべき点である。これは、最後の7章、“An Odor of Verbena”が加えられたことに大きく関わっていると考えられる。小論では、この小説の物語の続きでもある *Sartoris* (1929) との関連性をふまえて、*The Unvanquished* における“An Odor of Verbena”の役割を考察していきたい。

II

Faulkner の作品にしては珍しく *The Unvanquished* は、Bayard Sartoris という一人の人物の視点を通して作品全体が語られている。第1章“Ambuscade”では、Bayard Sartoris は12歳の少年として登場する。彼は同じ年の黒人少年 Ringo と本物そっくりの Mississippi の地図を地面に書き、その上で子供らしい無邪気さで南北戦争ごっこをしている。南部の劣勢をうすうす感じながら、地図の上で二人は必死に戦っているが、そこに、

Ringoの叔父のLooshがやってきて、二人の作った地図をあざけ笑うように払い除けていってしまう。父Colonel Sartorisが戦う南軍の勝利を信じている少年にとって、このLooshの行為は、これから彼とRingoに襲いかかってくる現実的な世界の前触れともいべきものであった。もちろんBayard少年がそれを意識することも認識することもできないのであるが、読者は、南部に襲いかかる運命と彼らの身の上にかかる深刻な事件を意識の流れの中で予測しながら読んでいくのである。

北軍がBayard家の付近に到達し、子供のBayardとRingoが北軍の兵士を狙い撃とうとする。家が戦場になり、男達が戦うべき戦争の中に少年達が巻き込まれ、銃の引き金さえ引かなくてはならないような緊迫した状況は、まさしく悲劇という他ない。少年達が北軍の兵士に追われ、祖母Miss Rosaの家に飛び込んで行くその瞬間まで、読者は殺伐とした悲劇の展開を予想する。

しかしながら、そのスリリングな推測は見事に裏切られ肩すかしをくうことになる。

Then she said, "Quick! Here!" and then Ringo and I were
squatting with our knees under our chins, on either side
of her against her legs, with the hard points of the chair
rockers jammed into our backs and her skirts spread over
us like a tent,⁽⁶⁾

北軍の軍曹が入ってくる直前にMiss Rosaのスカートの中に隠れ、二人はその中で息を呑みながら成りゆきを聞いている。いわゆるSouthern Belleに対する南部騎士道とも感じられる北軍の将軍の寛大さで二人は助かるのであるが、このあまりにも子供じみたお粗末な危機からの回避によって、物語は一気にコミカルな少年冒険物語と化してしまう。そして、この事件はMiss Rosaが"We shot the bastud,"(21)と叫んだBayardとRingoに下品な言葉を使ったことを咎め、石鹼水で口を洗うようにと言い付けるところで結末となる。加速された緊張感が、児戯的ともいえる軽妙なデヌマン(denouement)で終息するカタルシス(catharses)的手法は、大衆雑誌向きの物語として賛否両論が伴うところであるといえよう。Faulknerはもう一つ、非現実とでもいべき試みをしている。それは、黒人少年Ringoの扱いである。

. . . Ringo and I had been born in the same month and had
both fed at the same breast and had slept together and eaten
together for so long. . . (9)

まるで双児の兄弟のようにBayardに寄り添うRingoは、白人少年Bayardの影の存在のようであるが、この時点では、強い個性をも示さず人並み以上の頓知もなく行動的でもない

Bayard よりもより鮮明に描かれ、彼よりも優れた少年として描き出されている。Loosh の会話の中で北軍の優勢をいち早く感じたのも Ringo であり、Miss Rosa の銀食器とラバを取り戻す旅の際も先導して働き、彼女を助けるのはこの黒人少年 Ringo である。Faulkner は、折にふれ黒人が決して白人よりも劣った人間ではないことを繰り返して主張している。

With a little more social, economic, and educational equality the Negro will often be the landlord and the white man will be working for him. And the Negro won't come out on top because of anything to do with the race but because he has always gotten by without — scope — when they are given scope they use it fully. The Negro is trained to do more than a white man can with the same limitations.⁽⁷⁾

黒人を取り巻く諸条件が、彼らの社会的な立場を拘束しているが、Faulkner は、彼等の可能性を強く主張している。子供の頃から黒人と共有する世界に住み、自分の乳母 Mammy をこよなく愛した Faulkner は、作品の中でも愛すべき信頼できる黒人を描き出している。*The Sound and the Fury* の Dilsey の姿は、*Noble Savage* の域に達する程の黒人女性のすばらしい人間性を描き出していると考えても過言ではない。

Faulkner の描いた少年 Ringo は、まさしく奴隷解放へと向かう新南部社会の先導者ともいべき未来像を持ち得る人物として描かれている。何故これほどまでに Ringo の像をシャープなものとして作り上げる必要があったのであろうか。白人で主人公の立場にある Bayard よりも、将来が期待されるように描かれた Ringo 像は、*The Unvanquished* の前半の発展性のあるテーマの一つであるといえよう。こうした Ringo と共に、Bayard は次々と試練に直面していく。

第3章“Retreat”に入ると、Miss Rosa に連れられて Memphis へと旅立つ Bayard と Ringo は、突然の襲撃に会う。“men with wild faces full of yelling”(39) という男達に囲まれ、一瞬にしてラバが盗まれる。この非情な状況は、Bayard の素朴な目を通して事実を羅列した形で語られ、小年期の冒険を回顧的に語る少年物の物語形式をとっている。感情移入されないカメラのような目で追っていくこの旅は、悲惨な南部の状況を次々と写し出していく。焼き払われた家、解き放たれて戸惑う黒人達など、無秩序な混沌の中の南部社会が、平穏時の常識や正当性をくつがえしていく。下品な言葉に対して罰をうけることが、今では何も意味をもちえないという状態は、価値観や道徳感の規律が定まらなくなっていることを示し、一気に物語は15歳の少年が犯した最も残酷な事件へと導かれていく。

III

Miss Rosa は、偽の命令書を使ってラバを手に入れ、そしてそれをふたたび売り払うことを繰り返している。その時の南部社会の状態は、善悪の倫理規範で律しきれない世界となっていた。家を焼き払われ、黒人は主人を失い行く当てを探し彷徨い、あるいは人目を避けて隠れていた。家を焼かれた白人は黒人小屋に住み、白人の権威も財力もすべて無力となっていた。北軍が攻めてくることを察した Miss Rosa は、銀食器を土の中に隠す。銀食器はその家の誇りと力を誇示し象徴するものである。毎日黒人達に銀食器を磨かせ、一点の曇りもない状態にしておくことこそ、女主人の役目であり力量であった。婚礼の際に婚家に持っていくものの代表的なものは銀食器であり、その存在自体が家の力となっていた。崩れかけた南部を守るかのように、Miss Rosa は必死に銀食器を死守しようとする。しかし、Loosh の裏切りによりそれも北軍に取られてしまう。銀食器を探すことはすなわち、南部復興の一步であった。秩序も乱れ価値観も変わった社会情勢の中で、銀食器を探し求める旅の途中、Miss Rosa は殺されてしまう。

There was a tallow dip still burning on a wooden box, but it was the powder I smelled, stronger even than the tallow. I couldn't seem to breathe for the smell of the powder, looking at Granny. She had looked little alive, but now she looked like she had collapsed, like she had been made out of a lot of little thin dry light sticks notched together and braced with cord, and now the cord had broken and all the little sticks had collapsed in a quiet heap on the floor, and somebody had spread a clean and faded calico dress over them. (98)

荷馬車に座って Miss Rosa の帰りを待っていた Bayard と Ringo は、尽くす手だてすらなく、ただ Miss Rosa の死体を見つめるばかりであった。常に自分を守ってくれて、毎日混沌とした世界と一緒に生きてきた祖母の死、しかもその残酷な死に様は、15歳の Bayard に計り知れない苦痛と屈辱を与えた。人を殺すことの善悪を考える余裕は彼にはもはやなかった。目には目という行為のみが Bayard に与えられたすべてであった。

圧搾小屋（綿花圧搾包装小屋）で Grumby を殺し、その死体をドアに釘で打ちつけ、Miss Rosa の墓前に切り取った彼の右手を供えた。見事に仇討ちをとったともいえるこの行為は、南部における騎士道の鏡とでもいえるものであったのかもしれない。これをもって Sartoris 家の長男 Bayard は一家の一員としての確固たる地位を与えられたことになるの

かも知れない。しかし、15歳の少年が祖母の墓前に備えるものとしては余りにも血なまぐさく、祖母のスカートの中に隠れていた少年のコミカルなタッチはすっかり消滅している。

復讐という名のもとで、人を殺すことが正当化されてしまうことが、子供にまで浸透してしまったことは、真の意味で南部社会の道德感の崩壊を示しているに他ならない。南北戦争にまつわる短編を書くことを要求されていた当時の Faulkner が描いた南部は、こうした無秩序な南部社会の一面であった。

1936年12月28日に Bennett Cerf にあてた手紙の中で、Faulkner は *The Unvanquished* に収められた最初の6つの作品を “a series of six stories about a white boy and a negro boy during the civil war”⁽⁸⁾ と語っている。Faulkner はこれらの短編を一冊の本にできないかと思ってこの手紙を書いたようである。しかし、この二人の少年が犯した罪でありながら罪とはならなかった殺人をもって、二人の少年の物語、つまりは成長物語とすることはできなかった。Hemingway の Nick Adams Stories のような、苛酷な経験を積みながら逞しく成長していく Nick の姿を、Faulkner のこの作品の続編にみることは不可能である。

この手紙が書かれる前、1934年の晩春か初夏の Morton Goldman への手紙の中で、Faulkner は Sarturday Evening Post 社に送った “Ambuscade,” “Retreat,” “Raid” の3作品を書きおえたあとの苦悩を書いている。⁽⁹⁾ 南北戦争終結後の話、つまり、Reconstruction Time の物語が必要となるが、そこに到達しないというのである。Reconstruction Time を描くには、もっと何かを書き加えなくてはならないと Faulkner が主張しているように、残酷な復讐劇のあと、“Riposte in Tertio,” “Vendee” の2作品が付け加えられたが、それでも Reconstruction Time を描ききることはできなかった。そして、1936年の手紙にある、「一冊の本にする」⁽¹⁰⁾ ために *The Unvanquished* の最終章、“An Odor of Verbena” の構想を待つことになる。

最終章こそまさしく *The Unvanquished* の Reconstruction Time を示すものであり、さらに二人の子供の成長物語の終焉となるものと考えられる。さらに言えば、この章の存在により、Sartoris 家の物語の続編とでもいうべき1929年発刊の *Sartoris* へのパイプの役割を果たしていると考えられる。この最終章なくしては、Sartoris の物語は成立しないことになる。

IV

The Unvanquished の Bayard Sartoris は、*Sartoris* の Old Bayard である。*Sartoris* の Old Bayard は、南北戦争に参加するには若すぎ、第一次大戦には年を取り過ぎている人物で、Sartoris 家の「過去と宿命、そして一族の男達の生と死を見守り続けた人物」として描かれている。誰も訪れることのなくなったかび臭い部屋、時代に取り残された Sartoris 家の中で、時代に取り残されて過去の時間から抜け出せないまま静かに Aunt Jenny と暮らす Old Bayard は、偉大なる父 Colonel Sartoris の影を引きづり、孫 Young Bayard の過

激な短い人生を見守り、彼の車に乗って死を迎える。Bayard は決して「動き」を持つ登場人物とはなり得ない。時間の流れを冷静に意識してきた人物として人生を全うした Old Bayard は、かれの墓石に刻まれた文字、“Bayard Sartoris . March 16, 1893—June 11, 1920”⁹⁹のように、“simple”¹⁰⁰な人生をおくった人として描き出されている。

Old Bayard の息子である John Sartoris は、父親以上にその存在が忘れられている。Faulkner はこの点について、John Sartoris が何の波乱もない平和な時代に生を受けただけのことであると説明しているが、彼の存在を“he had to be there for the simple continuity of family.”¹⁰¹と言っている。こうした何も物語を作り得ないような人物の存在により、Sartoris 家の物語は存続していることがわかるが、このことで、Faulkner が決して一人の男の人生を物語る小説を描こうとしたのではなく、何代にもわたる一族の歴史を描こうとしたあらわれであるとも考えられる。Sartoris の執筆に際して、このような考えを持って Faulkner が小説を書いているとするならば、短編小説をまとめて小説としあげようとするとき、当然この大きな構造の一部となる小説をめざしたと考えられる。したがって、祖母のかたきをとって、死体の右手を墓に打ちつけるなどという残虐な行為、そうした発想を思い付くような Bayard 少年の未来が、「静」の中で生き、「時」にあわせ、規則正しく毎日を送ってはいるが、決して「時代」の流れについていっていない Old Bayard 像と適合するための試みがなされるはずである。

二作品にまたがる登場人物の性格、特徴が異なることは、Faulkner の作品にはよく見られることである。Snopes 三部作の第一作、*The Hamlet* に登場する Eula Varner もその一人である。“女性”を全面的に押し出しているような身体的特徴を持ち、鈍重なまでの行動、性格が、第二作、*The Town* では一変している。*The Hamlet* (1940) の出版から17年後の1957年に *The Town* が発行されたという時間的の経過が、作者 Faulkner の登場人物像に大きな変化を与えたのかもしれないが、この Eula の変化は三部作を読む読者には大きな驚きである。Bayard Sartoris の場合もそれと同列にあると考えられる。それでは、Faulkner はどのように、相反する未来像をもつ Bayard 少年を成長させ、一族の歴史小説ともいえる Sartoris 一族の物語を完成させたのであろうか。

“An Odor of Verbena” は、Bayard Sartoris が24歳、大学で法律を勉強する学生として登場する。Wilkins 教授の家で下宿しながら3年間の学生生活をおえようとしている時、父の死の知らせが届く。Bayard は Wilkins 教授がその事実を伝えようと部屋を訪ねてくる瞬間にその内容を察知する。“Because I was now the Sartoris.” (136) とその理由を述べている Bayard は、すでに最初の6章までの Bayard 少年とはちがひ、自分の存在を観念的に認識する青年になっている。Wilkins 教授は、父の死の知らせを受け取った Bayard に馬と拳銃を提供しようと、その機会を伺いながらも動揺の色を隠せないでいるが、Bayard は異常なまでに冷静であった。彼は Wilkins 教授夫妻の心の中も、知らせに来た Ringo の行動、そして自分を待ち構えている家の様子もすべて見通していた。

We roded on, toward the house where he would be lying in the parlor now, in his regimentals (sabre too) and where Drusilla would be waiting for me beneath all the festive glitter of the chandeliers, in the yellow ball gown and the sprig of verbena in her hair, holding the two loaded pistols (I could see that too, who had had no presentiment; I could see her, in the formal brilliant room arranged formally for obsequy, not tall, not slender as a woman is but as a youth, a boy, is motionless, in yellow, the face calm, almost bemused, the head simple and severe, the balancing sprig of verbena above each ear, the two arms bent at the elbows, the two hands shoulder high, the two identical duelling pistols lying upon, not clutched in, one to each; the Greek amphora priestess of a succinct and formal violence.) (138-139)

40マイルの道程を、彼はこの家に向けて馬をすすめていた。知らせを受けた瞬間から、いや、大学に来てから3年を迎える間に、彼は予想される父の死に対する自らの態度を “At least this will be my change to find out if I am what I think I am or if I just hope; if I am going to do what I have taught myself is right or if I am just going to wish I were.” (136) と考えていたのである。“Thou shalt not kill” (137) とという言葉の意味を身につけた Bayard は、それを彼に教えた Wilkins 教授が、“Dies by the sword. Dies by the sword.” (137) と心の中で考えていることを察知し、客観的な視点でそれを観察している。Faulkner は Bayard を、「父の仇をとる」という南部騎士道的な思想と距離を保ってそうした人々を冷静に観察できる程にまで成長させて、“An Odor of Verbena” を書き始めたのである。

Bayard の予想通り、Ringo は貸馬車屋にすでに寄って馬を手に入れ、玄関で Bayard を待っていた。やはりここでも Ringo は頭のきれいな役に立つ黒人として登場する。しかし、この Ringo を Bayard は次のように評している。

He was twenty - four too, but in a way he had changed even less than I had since that day when he had nailed Grumby's body to the door of the old compress. Maybe it was because he had outgrown me, had changed so much that summer while he and Granny traded mules

with the Yankees that since then I had had to do most
of the changing just to catch up with him. (136)

少年時代の Ringo と Bayard の成長する姿は、この Bayard 自身の語りによって説明しつくされてしまう。父 Colonel Sartoris までも認めた Ringo の優秀さは、その時点のままに留まり、発達性のない人物として落ち着いてしまった。そのかわりに、いつも Ringo の影のようについていた白人の Bayard が、物語として登場しない九年間の生活を経て、主人として、白人として、人間として大きく成長を遂げているのである。Grumby 殺害という罪は罪として罰せられることもなく、さらに逆の良い方向へと Bayard を導いたきっかけになったとすると、少年少女向けの更正物語として、また回心物語として見事な結末であるといえる。こうして Bayard は “An Odor of Verbena” で九年の時間を経て再び登場すると、彼は Sartoris 家を見事に守り抜けそうな後継者として、いわゆる「Sartoris 家の人間らしくない」行為でもって、Sartoris 家を存在させ、それを次の世代へと導き始める。

家路の途中、Ringo は “We could bushwhack him, ” . . . “Like we done Grumby that day. But I reckon that wouldn’t suit that white skin you walks around in.” (138) と Bayard に復讐することを確認するかのように問い掛けるが、Bayard はすでに Ringo に “No,” (138) と返答できる自信を身につけていた。兄弟のように育ち、祖母の Miss Rosa を「おばあちゃん」と呼ぶことまで許されていた Ringo ではあったが、24歳にしてその存在は Bayard の影の存在となってしまうのである。Sartoris における Old Bayard の意志の強さや頑固さはこの頃すではっきりとした性格として位置付けられていることになる。ここから、Ringo よりも優れた人物として成長した Bayard の人物像をより具体的にそしてより明確にするために、父親の敵討ちを確信している周りの人々の中における Bayard の行動が展開される。

真夜中に Sartoris 家に辿り着いた Bayard は、家族や父の側近から熱烈な歓迎を受ける。バーベナの花をさし、復讐すること以外の考えを持ち合わせない Drusilla は、当然のことにように彼に拳銃を手渡す。義理の母 Drusilla は彼の予想通り熱狂的に “How beautiful you are : do you know it? How beautiful : young, to be permitted to kill, to be permitted vengeance, to take into your bare hands the fire of heaven that cast down Lucifer. . . .” (150) と結果を期待するが、しつこく付きまとうバーベナの薫りと彼女の言葉は、いとも簡単に Aunt Jenny の “Take her upstairs” (151) という一言で打ち消されてしまう。男性とおなじように戦場で戦った女性として特殊な背景を持ち、Colonel Sartoris の後妻になり、Sartoris 家と義理の息子 Bayard にすぎましい影響を与えるかのように独特な特徴を持ち合わせていた Drusilla であるが、“a poor hysterical young woman” (151) とこともなげにその存在自体を制限されてしまった。

いままで「動き」のあった登場人物が、こうしてその動きをとめられた中で、Bayard が行動をおこすのを背中をおすようにして助け始めるのが、Aunt Jenny ののである。The

Unvanquished では、Aunt Jenny は第7章の“An Odor of Verbena”で登場する。*Sartoris* において「動き」を持つ人物である Aunt Jenny は、Bayard と共に生き長らえ、Sartoris 家の悲劇を見守り、没落しつつある Sartoris 家の中で、Bayard の死とそして新しい Sartoris 家の担い手、Young Sartoris の息子、Benbow Sartoris の誕生を見て、この一家の継続の微かな期待を抱く。Aunt Jenny は Sartoris 家のバトンを繋いでいく男達の存在を見届け、つぎへのバトンの受け渡しを助け、見守り、確認する作業を担っている。

Sartoris 家の次の世代を常に見つめている Aunt Jenny に、Faulkner は同じ役目を *The Unvanquished* においても与えている。彼女は““You are not going to try to kill him. All right.”” (151) と、帰宅して Dursilla の激しい言葉を聞いた直後の Bayard に確認するかのように尋ねる。そして、Bayard は棺の中の父に対面する。

It had begun by that time; I panted, standing there, and
this was it — the regret and grief, the despair out of which
the tragic mute insensitive bones stand up that can bear
anything, anything. (152)

込み上げる悲しみの中、彼は父の屍を見て、あらゆる苦悩や困難そして逆境に耐えることを学ぶ。それは、父親と話した時の記憶に寄るところが多い。

“...Yes, I have accomplished my aim, and now I shall do
a little moral house—cleaning. I am tired of killing men, no
matter what the necessity nor the end. Tomorrow, when
I go to town and meet Ben Redmond, I shall be unarmed.”

(146)

父は故郷を守るためにそして自分を助けるために戦い、平和な世の中の到来とともに積極的に勢力を伸ばしていった。Bayard はこうした父の姿を見つづけてきた。これからは息子の手伝いを必要とし、人を殺すことによって争いごとを解決することを止めようと決心してた父が拳銃で殺されたことは、父が最後に素手で戦うことで生きる道を探し求めてしたことを知った Bayard にとって、凶りしれない悲しみと落胆をもたらしたことであろう。父が最後全うしようとした非暴力的な解決方法を実行することが、自分に課せられた義務であり使命であると、Bayard は父の死体の前であらためて実感した。

次の日、Redmond に会いに行く前に、Bayard は Aunt Jenny から““No bloody moon.”” (154) と語った一人のイギリス人の話を聞く。彼は武器を持たずに Redmond に会いに行くことを、誰にも相談することなく心の中できめていた。南部の人々が彼に期待していたことを裏切ることになる自分の行為を、彼は最後まで口にするにはなかった。人々に理解され、

受け入れられるはずがないため口に出す必要がないという考えに基づくものではなく、彼は自分のこうした行為を説明する言葉を見つけることができなかつたのかもしれない。Aunt Jenny の言葉は、非常に明確に彼の行動を説明するものであった。George に、“Who are you? Is your name Sartoris? By Gód, if you don’t kill him, I’m going to.” (156) と詰め寄られた Bayard は、“I’m tending to this. You stay out of it. I don’t need any help.” (156) と答えたものの、自分の思いを十分に表現できなかった。そしてついに Aunt Jenny から聞いた言葉、“No bloody moon” を呟るのである。そしてその言葉を残して、彼は一人で Redmond の事務所に入っていく。

V

父が最後に願っていたように、Bayard は拳銃を持たずに Redmond に会い、そして生きて戻ってきた。誰もが何が起こったのか初めは理解できなかった。階段を降りて来た時、George がうち沈んだ眼差して、“Who not? You ain’t done anything to be ashamed of. I wouldn’t have done it that way, myself. I’d a shot at him once, anyway. But that’s your way or you wouldn’t have done it.” (158) と言った。Redmond を殺せず、しかも自分も生きて帰って来た Bayard に対する世間の目は、この George の言葉に集約されていると考えられる。復讐は当然のことであり、失敗は許されないという信念がたたき込まれている南部社会の中で、Bayard の行動はとうてい信じがたいものであったであろうが、実際にこうして Bayard が無事に帰って来て、みんなの興奮が冷めていくにつれて、彼の行動は次第に受け入れられ認められていく。Redmond は町を去り、そして Bayard に拳銃を与えた Drusilla もバーベナの枝を残して Montgomery へと旅立った。彼女は決して Bayard に失望して去っていったのではない。男のように勇ましく戦う女兵士、そして Sartoris 家を支え、義理の息子を助け育てる義母というすべての役目自分を終えたのであり、失ったのである。

Bayard は Redmond の事務所を出た後、すぐには家に戻らず、牧場を横切り小川にそ沿った低地にある茂った風通しの悪い日影に来た。父親の死体を見た時の“panting”はもうおきなかった。彼は5時間、夢も見ないで眠り、泣きながら目覚めた。慣習と周囲の期待に押しつぶされそうになりながらも、自分の意志を貫き、新しい形の復讐を成し遂げた Bayard は、社会的、歴史的慣習から自らを開放し、ようやく心安らかな気持ちを持ち、あらためて父の死を悲しんだのである。彼のかたわらには、Ringoが静かに付き添っているのである。

1861-65年の南北戦争は、南部そのものの変革となる正しくその転機である。多くの人間や事物、そして慣習がこの戦争で失われた。時代に翻弄されて滅びるものもあり、それを乗り越えて逞しく根を張り生きていくものもあった。The Unvanquished はそうした南部人の変化を実に鋭くとらえた作品であるといえる。The Unvanquished の最初の6章は、まさし

く混沌とした価値観が定まらない南部社会に翻弄される人々が描かれたものの、そのコミカルな場面とともに軽快に読みすすめることができる物語である。一人一人の人物が、時代に触発されて、その個性を発揮し、快活に生きてゆく。売れるための物語としてうってつけであるこの6編の短編は、最後の締めとして“An Odor of Verbena”によって上手く軌道修正された。Bayard以外の登場人物の行動を制することによって、さらにそれ以上にBayardが教育を受け、精神的に成長したという前提のもとで、その正当性が主張されている。南部の因襲を勇気をもって変革したBayardの姿は、父Colonel Sartorisの戦争時の偉大さと同じように讃えられることとなった。

The Unvanquished is a novel about growing – up —
it is the story of an education.¹⁴⁾

とC. Brooksが語るように、“An Odor of Verbena”をもって*The Unvanquished*はBayard Sartoris少年の成長、教育の完成をしめしているとも言えるのかも知れない。新しい価値観がBayardの勇気をもってまた一つ南部の中に加えられていった。

そして最後に、*The Unvanquished*からSartorisへと引き継がれていくものが、作品の最後で加えられている。

“Oh damn you Sartorises! . . . ”Damn you! Damn you!”

(160)

Aunt Jennyのこの叫びは、*Sartoris* (1929)においてAunt Jennyが言う“Sartoris. It is the blood.”¹⁵⁾と同じであり、Bayardの孫、曾孫にも引き継がれていく運命なのである。滅びゆく南部と滅びゆく一族を赤裸々に描き、それを生活の糧として売り込みながらもFaulknerが時代に耐え、一族の宿命とその血の存続の為に生き長らえていくSartoris家の物語を完成させることで、いかに南部復興を期待し、南部の力が再び沸き起こってくるのを強く願っているかを理解することができる。

註

- 1 Arnold Goldman, “Faulkner’s Images of the Past : from *Sartoris* to *The Unvanquished*, in *William Faulkner : Critical Assessments*, Volume III, Henry Claridge, (Helm Information Ltd, 1999), p.434.
- 2 John B. Cullen, *Old Times in the Faulkner Country* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1961), p. 66.
- 3 F. L. Gwynn and J. L. Blotner (eds.), *Faulkner in the University*, p. 252.

- 4 *The Unvanquished*に収められている作品のうち、*Saturday Evening Post*には次の5編が、“Ambuscade”, “Retreat”, “Raid”, “The Unvanquished,” (後に“Riposte in Tertio”と改題される) “Vendée”, *Scribner’s Magazine*には“Skirmish at Sartoris”が掲載された。
- 5 cf. Susan V. Donaldson, “Dismantling the *Saturday Evening Post* Reader : *The Unvanquished* and Changing ‘Horizons of Expectations’”, in *Faulkner & Popular Culture*, D. Fowler and Ann J. Abadie (eds.), (Jackson : University Press of Mississippi, 1988), pp.179–195.
- 6 William Faulkner, *The Unvanquished* (New York: A Signet Book, 1952), p. 22. この作品からの引用及び作品への言及は、すべてこの版に基づくものとし、以後、引用箇所には、括弧内に頁数を示す。
- 7 James B. Meriwether and M. Millgate (eds.), *Lion in the Garden : Interviews with William Faulkner* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1980), p. 264.
- 8 Joseph Blotner (ed.), *Selected Letters of William Faulkner* (New York : Vintage Books, 1978), p. 97.
- 9 *Ibid.*, pp. 80–81.
- 10 *Ibid.*, pp.97–98.
- 11 William Faulkner, *Sartoris* (New York : The New American Library, 1953), p. 312.
- 12 *Ibid.*, p.312.
- 13 F. L. Gwynn and J. L. Blotner (eds.), *Faulkner in the University*, p. 251.
- 14 Cleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven : Yale University Press of Virginia, 1977), p.84.
- 15 William Faulkner, *Sartoris*, p. 160.